



1973年(昭和48年)、ある信用金庫が倒産の危機に追い込まれました。その原因とは？

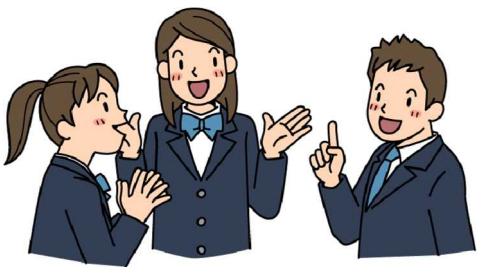
冗談が招いた危機！



就職が決まった3年生は、友達同士で就職先の話をするところもあるでしょう。この事件もそんなことが発端でした。ある信用金庫に就職が決まっていた同級生に対して、友だちが軽い気持ちで「信用金庫は(銀行強盗に襲われるから)危ないよ」と冗談を言ったのです。

友達の冗談を真に受けた生徒は、親戚のおじさんに具体的な名称は言わずに「信用金庫は危ないのか？」と尋ねたところ、おじさんは勝手に〇〇信用金庫のことだと思い、その信用金庫の近くに住む親戚に「信用金庫は危ないのか？」と問い合わせたそうです。そのたった一言の素朴な質問は人から人へと投げかけられ、その情報は「信用金庫は危ないのか？」⇒「〇〇信用金庫は危ないのか？」⇒「〇〇信用金庫は危ないらしい」⇒「〇〇信用金庫は危ない」と断定的な噂に変化して行きました。

そんな噂を知らない社長さんが仕事の支払いで「〇〇信用金庫から120万円おろせ」と電話でやりとりしていました。噂を聞いていた人がこのやりとりを“〇〇信用金庫が倒産するので預金をおろそうとしている”と勘違いし、自分も預金をおろしたそうです。そして知人に「〇〇信用金庫は危ない」と伝え、その噂はどんどん人々に広まりました。そして、ついに「〇〇信用金庫は潰れる」という断言になり、噂を信じた人たちは預金の払い戻しに殺到し大騒動になりました。友だちの冗談発言からたった一週間の出来事です。噂を知った信用金庫はデマを否定するものの、かえって人々は不安になり、



その後も「職員の使い込みが原因」、「5億円を職員が持ち逃げした」、「理事長が自殺」という二次的なデマが発生しました。

みなさんは大丈夫ですか？大事になるような冗談を言っていませんか？軽い気持ちで口にしたことがこんな大騒動になったという事実があったことを覚えておいてくださいね。

ところで、短い文を伝えていく伝言ゲームをしたことはありませんか？やってみると最初の人と最後の人が把握している内容が大きく違うことがあります。ポイントとなる情報を漏らしたり、自分の関心のあるところだけを伝えたり、憶測の情報を付け足したりと、伝わるごとに情報は加工され、人の話はあてにならないことを感じます。特に噂話は伝わるごとにエスカレートする傾向があります。

この事件を活かすならば、“人から聞いた話は事実を確認してから人に伝える”ということです。ホームページやSNSで知った情報も真実かどうか分かりません。複数の情報源や信憑性のある情報源を確認しながら判断してください。よく、SNSで間違った情報が広まるのもこの事件と同じことです。広めている人たちは、正義感で「この情報を早く多くの人に知らせてあげないと」と思っている行動でしょうが、結果としては逆にみなさんを混乱させてしまっているのです。情報を簡単に広く発信できる世の中だからこそ、自分が発信する情報、言葉には大きな責任があるのです。